

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370800502		
法人名	社会福祉法人 愛隣園		
事業所名	愛隣の家グループホーム		
所在地	熊本県山鹿市津留2025-1		
自己評価作成日	令和2年11月16日	評価結果市町村受理日	令和3年1月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	令和2年12月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

県北の自然豊かな地に位置し、関連施設が多数隣接し、近くに公園もある環境と木造で温もりある建物を活かし、「ゆっくり笑顔であるがまま 楽しくみんなとつながろう」の理念実現のために、地域との交流を大切にし、本人らしく、入居者と家族との関わりを大切にする安心できる生活を目指しています。コロナ禍のなかでも、全職員が笑顔で明るくサービスの質の向上を目指している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

愛隣の家グループホームは、関連の高齢者・身体障害者・児童の福祉施設が立ち並ぶ一角に位置している。理念は、入居者の笑顔を大切に、近隣の方や市と連携しながら入居者も職員も楽しく過ごせるように、との思いを込めて作られており、課題が生じた時は理念に立ち戻って振り返り、実践に繋げている。特に今年度は、コロナ禍で、家族に会えない入居者に寄り添い、できるだけ楽しんでもらうにはどうしたらよいか、ストレスが溜まらないようにするにはどうしたらよいか、職員でアイデアを出し合い、外出ができない中、ホーム内での行事を充実させている。また、食の楽しみを重視しており、入居者は、ゴボウのさがきやもやしのひげ根取りなどの下ごしらえや、つぎ分けたりお盆を拭いたり、自分ができるお手伝いを一緒に行っている。季節の行事食や敬老の日のごちそう、誕生日はその人の好きな料理とデザートを提供するなど、楽しい食事への工夫がみられた。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり笑顔であるがまま 楽しくみんなとつながろう」を職員でつくり、玄関・台所・職員トイレ等に掲示、朝礼や話し合いにて共有、この理念を元に全職員が常に意識し行動、実践につなげている	理念は、入居者の笑顔を大切に、近隣の方や市と連携しながら入居者も職員も楽しく過ごせるように、との思いを込めて、ホーム開設時の職員が話し合っ作っている。朝礼・申し送りや日誌で情報を共有し、課題が生じた時は職員で話し合い理念に立ち戻って振り返り、チームケアを大切に実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年は、残念ながらコロナ禍のため、地域の三岳文化祭に作品掲示のみ協力している。その他の地域行事には参加はしていない。コロナ終息後は、参加を楽しみにしています。	これまでは、地域に買い物や外食に出かけたり、法人の夏祭り・地域の三岳文化祭・包括主催の「地域を歩いてみよう」等に参加して地域の方と交流していたが、今年度はコロナ禍で三岳文化祭への作品掲示のみ行っており、外出しての交流は控えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「介護なんでも相談所」を設置、誰でも気軽に相談できるように、看板を立てている。又、コロナ禍前までは、「地域を歩いてみよう」に職員・入居者参加し、地域の人々に貢献できる場所となっていた。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族の協力を得て、参加してもらえた時があったが、コロナ禍になり、開催を中止しました。感染症対策として、資料及び質問や意見用の用紙と返信用の封筒同封し郵送した。コロナ禍の生活や感染症対策の様子を報告し、認知症への理解を深めサービス向上につなげている。	運営推進会議は、区長・公民館長・老人クラブ会長・民生委員・市担当者・包括担当者・入居者・家族等をメンバーに2ヶ月に1回開催し、委員から地域のお店の情報を得て出かけるなど、運営に活かしている。コロナ禍の今年度は、ホームの活動実績や感染防止対策等の資料を委員に送付し、意見・質問を得る形で実施している。委員から多くの意見や質問等が寄せられ、意見の取りまとめと質問への回答を次回の資料送付の際に添付するなどのやり取りを行い、サービス向上に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に地域包括支援センター・長寿支援課職員の毎回の参加により相談しやすく、連携の強化につながった。	運営推進会議には毎回市担当者の出席があり、介護保険関係の新しい情報や市の行事等の情報提供があっている。運営に関しての疑問を気軽に相談に行ったり、認知症サポーターリーダーの講座等の際は協力するなど、連携が図られている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	コロナ禍になるまでは、隣接施設との合同の身体拘束廃止委員会に参加することにより、理解や意識を高め、全職員への回覧や報告。コロナ禍後は、ホーム内にて、短時間でも身体拘束しないケアを話し合い、実践している。また、感染予防のため、外出を控えたが、ストレスが溜まらないようにホーム内の行事に工夫をしたり、日光浴をしました。	コロナ禍の現在は、ホーム内で事例検討やスピーチロック等について話し合い、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。特に声掛けの言葉遣いには気を付けており、「座っていて」という代わりに、入居者が集中できるようなことを提案してやってもらうなど、皆で検討している。また、管理者は職員のストレスを溜めないことが重要と考えており、有休・連休・希望休等がスムーズに取得できるよう配慮したり、職員が迷うときにすぐに相談できるよう、管理者・副主任・リーダーのうち誰かが必ず勤務するよう配置するなど、工夫している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員が虐待防止に関心を持ち、事件の報道を話題にあげ、意見を出し合い防止に努めている。又、コロナ禍前は定期の身体拘束委員会に参加し、全職員に回覧・報告。コロナ後は、短時間だが、ホーム内で身体拘束について話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は家族より相談受け、助言や協力などの支援している。職員は学ぶ機会があり、情報の共有もできている。(成年後見制度利用は現在1人活用)		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行い、不安や疑問を必ず尋ね、理解・納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の言葉や態度から、要望を聞き、察する努力や言いやすい働きかけにて、運営に活かしている。コロナ禍の為、家族には電話で話し合いの機会を設けている(管理者、担当、看護師)。全家族に電話で、面会制限の説明及び協力を得られた、この時に、家族の気持ちも知ることが出来良かった。ホーム内での写真を各家族に送り、日常生活の様子を伝える事ができた。家族会は、延期している。	面会制限の中、電話で毎月家族に入居者の近況報告をしたり、日常の写真を送って安心に繋げている。現在の家族の意見・要望は、感染対策のことと、コロナ終息後は計画を立てて一緒に外出したり連れて帰りたいというものも多く聞かれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、職員に対し、意見や気づきを言えるように働きかけ、すぐに反映させている。運営者は、日頃の報告・相談にて、職員の意見を反映している。コロナ禍の為、会議中止し、職員の気づきやアイデアの提案、ケアの手順の統一の再確認などを毎日のミーティングで行っている	職員の意見・提案等は、気づいた時にすぐに管理者・副主任・リーダーの誰かに伝えることを伝えており、どんな形でうまく実現させていくか話し合い、取り入れている。入居者が入れ替われば、ケアのやり方、業務の流れも変わってくるので、皆でアイデアを出しながら、修正しながら、業務改善を行い、共有してケアにあたっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	コロナ禍の中でも柔軟な対応ができるよう、必要な時間帯に職員を確保するための話し合いや勤務の調整に努め、変更や工夫をすぐに行っている。職員がやる気の出せる職場環境や整備に常に努めている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修会は、コロナ禍の為中止となったが、毎月の感染症拡大防止対策委員会参加及び報告は出来ている。ホーム内での短時間研修会は開催し、質の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	山鹿地域グループホームのグループラインで相談して、意見・情報交換している。また、隣接の看護師・介護職員・管理栄養士との交流もあり、質の向上につながっている		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	不安や要望を言いやすい働きかけや本人と向き合う姿勢を常に持ち、配慮や努力を全職員がしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入する段階で、家族等が困っていることや不安・要望等に耳を傾けながら、相談しやすい声かけや雰囲気作りを行い、家族との信頼関係作りにも努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族との話し合いの中から、その時必要としている支援を共に考え、介護計画や環境作りを行なっている。入所前の段階から、管理者と担当介護者で訪問して必要な支援を見極めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の経験や知恵を言いやすい働きかけから、職員と共に暮らして楽しむ場面を作り、共に暮らす関係を築けている。また、本人の人生を理解した上で、生活の中で本人が選択できる場面を作り、共に生活を考えるように全職員が接している。情報の共有もできている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と共に本人を支え合う関係を作り、電話や窓越し面会時に家族の絆の大切さが再認識できるように働きかけている。通院には、家族の協力もあり共に支え合っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	隣接の施設の馴染みの人とおしゃべりがしやすいの支援。コロナ禍前は、地域の行事参加時には、必ず声をかけてくださる方がおられ、馴染みの関係ができていた。コロナ禍、外出を控えている。	コロナ禍以前は、隣接施設の知人・友人に会いに行ったり、近所の方が面会に来たりしていたが、現在は外出もできず、電話のみでの関係継続となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の相性・要望を考え、食堂や居間での席を配慮。役割分担により利用者同士が支え合っている事を実感されている。又、孤立することが無いように職員が橋渡しになり、より良い関係づくりを支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設等に入所された方に会いに行き、関係を断ち切らないようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族から本人の人生の情報を把握し、本人の希望を聞き取りながら、本人本位の生活を検討している。又、要望の訴えない方には、顔の表情や行動、態度、家族からの情報をもとに本人の想いを検討している。本人の状態変化に伴い、臨機応変に対応を工夫している。	担当者を決めており、食べたい物ややりたい事など確認している。要望を言えない人は、家族に聞いて対応している。新聞を読む方のためにホームで新聞をとったり、本好きの方に雑誌を用意したり、ビールが好きな方には父の日にノンアルコールビールを提供するなど、意向を把握し、意向に沿った対応に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の施設や家族からの情報だけでなく、入所後も窓ごし面会時や電話での報告時に家族から生活歴を収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活歴や本人の想いを踏まえ、個別の1日の過ごし方を把握している。又、少しの変化でも適宜記入・共有・ミニカンファレンスの開催にて検討し、全職員で連携をとり、把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当制にて、家族との連絡時や状態報告時に意見や要望を聞き、全職員で検討し、介護計画を作成している。主治医の意見や職員のアイデアを反映している。窓ごし面会時にも報告・意見交換している。コロナ禍の為、担当者会議は中止している。	現在は、家族の意見・要望は電話で聞き、担当者に入居者の状況を確認して、年1回モニタリングを行い介護計画を作成している。本人の希望の中から実現可能なものを探り、計画に反映していくことを心がけている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の変化や状態がわりやすいように個別に記録し、情報を共有したり、気づきをすぐに記載し検討、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	愛隣園法人事業の多機能を活かした柔軟な支援や協力体制がある。コロナ禍前は、慰問や法人秋祭りなどは、地域の方の交流の場である。昔ながらの行事(大祓い、紀元節式典、花まつり、法話会など)や敬老の日には、お祝いの手作りお菓子や劇へのお誘いあり、喜ばれている。(コロナ禍、中止)		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍前は、多数の施設が近隣にある関係で、保育園・踊り等の慰問や各行事は、ホームに必ず声かけの働きかけがあり、外出の支援ができていた。また、運営推進会議にても働きかけをしていた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望を聞き、かかりつけ医の受診を家族とホームとで協力して、受診介助、情報提供を行い、医師との連携にて、適切な医療を受けられるように体制を整えている。家族への連絡・報告も行っている。	本人・家族の希望に沿ったかかりつけ医と連携している。大半の方は月1回～2回の訪問診療を受けており、変化があった場合は家族に連絡している。また、主治医が遠方の方は家族が定期受診に同行している。普段から連携を密にし、夜間・緊急時も電話で指示を仰ぎ、対応してもらえる体制ができている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師資格を持った職員が医師との連携のうえで、日常の健康管理や状態変化に応じた支援ができている。看護師不在の日は、隣接の特養看護師に気軽に相談できている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は情報提供受け、経過記録記入。又、ダメージ防止のため居室にある馴染みの物を持っていったりしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に「事前指定書」にて、家族に重度化した場合の意向や終末期のあり方について、早い段階から本人や家族等、かかりつけ医とも話し合っている。全職員、方針の共有ができ、チームで取り組む体制が出来ている。重度化への対応は、その都度に全職員で検討し、見直している	入居時に、家族が入居者の終末期の在り方を考える機会として、栄養補給や心肺蘇生等についての「事前指定書」を提出してもらっており、その後も適宜意思確認を行っている。多くは最期は医療機関に搬送しているが、今は看護師の配置もあるため、家族の希望があり、主治医・家族の協力が得られれば、ホームでの看取りも可能である。	職員への終末期ケアの勉強会の実施も期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時に備え、全職員がマニュアルを把握しており、コロナ禍前は隣接の特養の勉強会にも随時参加していた。又、救急救命の実技・講習参加もできていた。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	関連施設が多く、緊急時の協力体制あり。消防署来所にての火災訓練や緊急用ボタンで隣接施設からの協力体制及び訓練もできている。	年2回、隣接施設に協力要請したうえで、1回は消防署にも来てもらい、ホーム独自の避難訓練を行っている。訓練に地域の方の参加も予定されていたが、コロナ禍のため延期になっている。今年夏に大雨で断水した際は、隣接の特養の協力を得て乗り切るなど、非常時の協力体制ができている。	夜間想定訓練はあまり行われていないとのことであり、実施することが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の自尊心を傷つけないように常に考え、声かけやケアを行っている。申し送り時は、名前でなく居室の番地を活用にて配慮。排便は「お花」、排尿は「お水」に言い換えて、職員同士の情報共有及び配慮している。	入居者が排尿・排便で失敗した際、気にして「ごめん」と言われる方もおり、心配しないように羞恥心に配慮した声掛けを心掛け、他の人にわからないように着替えを準備するなど留意している。また、英語でグッドモーニングと挨拶した方が喜ぶ方や、フルネームでの呼びかけを好む方など、一人ひとりに合わせた言葉かけで対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	選択肢を作り本人が選択しやすい場面作りや、日常生活の中で希望、関心、嗜好を言える働きかけをゆっくりとした声かけで行っている。本人の反応や表情などで納得されているかを確認している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペース優先で、柔軟な対応を心がけている。コロナ禍前は、地域や関連施設での行事等も強制することなく本人の選択に任せていた。また、本人の希望を確認し、【その時に何を優先すべきか】を必ず頭の中に入れ実行。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪は、地域の理容室に来てもらっている。服装は、職員と共に選ぶ機会を作り支援。入浴後の化粧水やクリームの介助など細やかに配慮。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の楽しみを重視、嗜好把握し、喜びある食事に努めている。好き嫌いの多い方への対応も出来ている。能力に応じ、場面作りを積極的に支援している。祝日や誕生会の献立には希望を聞きながら、変化をつけ、楽しんでもらっている。	献立は、栄養士が入居者の要望を聞きながら作成し、職員がローテーションで調理を担当している。入居者は、ゴボウのさがき、ピーマンの種取り、もやしのひげ根取りなどの下ごしらえや、つぎ分けたりお盆を拭いたり、自分ができるお手伝いを一緒に行っている。季節に合わせた行事食、敬老の日にはお祝いのメッセージを添えたごちそう、誕生日はその人の好きな料理とデザートを提供するなど、楽しい食事への工夫がみられる。好き嫌いのある人には、代替食の準備もしている。	コロナ以降、職員は入居者と同じ食事を摂っていないが、コロナ終息後は、できれば一人でも職員が入居者と一緒に同じ食事を味わうことを再開し、よりおいしい楽しい食事に繋がることを期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が中心となり、本人の希望を取り入れたバランスのとれた献立、確実な水分補給の支援。病気でも家庭的で満足できる工夫。本人の習慣を大切に、食事摂取量のチェックと記録も行う。個人の嗜好を重視し、好き嫌いの多い方のために、常時代替を用意している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの能力に応じた支援を行っている。また、入れ歯洗浄(薬)も行っている。歯科医訪問(アセスメント作成)もあり、アドバイスを受けている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間ごとにさりげなくトイレへ声かけ・誘導。陰部洗浄や清拭も随時行っている。本人に合った排泄や昼夜の排泄介助についても話し合っている。	日中は、時間や入居者の表情を見て全員トイレに誘導している。夜間はトイレ使用の方・ポータブルトイレ使用の方・おむつ交換の方と、個々に応じて対応している。排泄用品は、肌に合うかどうか、パットの大きさ等一人ひとり検討し、昼夜も分けて使用している。今の状態を維持できるよう、支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜・キノコで便秘予防 又、水分補給と運動の働きかけの支援にて、自然排便を増やしている。主治医への相談も行なっている。テレビの体操(録画)を見て体操される場面作りも毎日できている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	回数や順番は、本人の希望に合わせている。しょうぶ湯やゆず湯など季節を味わい楽しめる支援。重度化に伴い職員2人介助で安心して入浴できる支援もできている。福祉用具の検討も行っている。	入浴は、基本的に週3回、午前中に実施している。浴室の壁は檜、浴槽はヒバづくりで、温もりが感じられる。菖蒲湯・柚子湯などで季節を味わったり、お風呂の中で歌ったりお話ししたり、楽しい入浴となるよう支援している。現在、リフト浴の導入が決定し、お試し使用中であり、今後は職員の負担減とともに、入居者全員が浴槽に浸かることができ、さらに楽しい入浴となることが期待できる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人に合わせた就寝・起床。温湿度に注意し、加湿器や個人に合わせたエアコン・あんか・電気毛布・氷枕の使用が出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋ファイルが、常時すぐに見れる場所にあり、全職員は薬の目的や副作用、用法や用量について理解。変更時は確実な申し送りを実践。症状変化時は、看護師や主治医に相談や報告。服薬は、個人能力に応じ介助し、確実な服薬のために声かけと確認ができています。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人の生活歴や力を把握し、個別の楽しみ(買物・貼り絵。大正琴・歌・塗り絵)にて張り合いのある生活につながる支援をしている。個別の嗜好品(お菓子や果物)がいつでも食べられる支援もしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍前は、希望に合わせた外出や季節を感じる外出・関連施設での慰問・地域の行事等の外出支援が出来ていた。コロナ禍、外出を控えている。コロナ終息後の外出を楽しみにしており、家族も「終息後は、外出を計画する」と楽しみにされている。	コロナ禍以前は桜・つつじ・コスモスなどの季節の花見や、ホテルのバイキングでの外食に全員で出かけるなど、外出を楽しんでいたが、現在は外出を控え、敷地内での散歩・日光浴を行っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	全職員、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、本人の管理能力に応じ、個人の希望、及び、家族との話し合いをしている。自己管理やコロナ過前は外出時の財布持参での買物支援をしていた。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由に電話をかけることができる。電話は2台設置により、使いやすい場所を利用してもらっている。遠方の家族から電話があり喜ばれている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者と共に、季節に応じたホーム内の飾りつけをしている。必要に応じ、寒冷遮やすだれ・よじずを使用したり、テレビの音量や番組にも常に配慮し録画もしている。個人に合ったイスを使用。	廊下には季節に応じて皆で作る大きな貼り絵や、入居者の習字作品などが掲示され、日頃の活動の様子が伺える。また、食堂以外にも居間や廊下など所々にソファや椅子が置かれ、入居者が好きな場所で自由に寛ぐことができる。テレビは2ヶ所設置しており、入居者の好きな時代劇や子ども番組、懐かしい歌番組など録画して楽しく過ごせるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂・2つの居間にて、ソファ・数種類のイスが随所に置いてあり、自由に選んで過せる場所に配慮。また、入居者同士の相性も考慮。1人でゆっくりとテレビを見たい方への配慮もできている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の協力あり、使い慣れた家具、仏壇、イス、毛布類、テレビ等や家族写真を自宅より持参。各行事での贈り物を本人居室に飾ってもらい、毎日見ておられる方もいる。	各居室には作り付けの大きな収納がある他、入居者が持参したタンス等でよく整理されている。それぞれに仏壇・テレビ・ソファ・テーブル・椅子・毛布など使い慣れた品を持ち込み、家族写真や習字の作品を飾った部屋もあり、一人ひとりに応じた居心地の良い部屋作りが見られた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室は番地と名札を掲げている。基本バリアフリーで安全に配慮した作りの中、個人の能力をみて、できるだけ自立した生活がおくれるように手すりを増やした。		